

生活科学学習指導研究委員会

一 テーマ

対象と夢中になって関わる中で、自己発揮していく子どもの育成

二 テーマ設定の理由

上記のテーマを設定し6年目となる。本年度は4月に新型コロナウイルス感染予防のための休校が行われ、本来だったら子どもたちと共に感じたい春の景色も、子どものいない学校で、不安を感じつつ眺めるというスタートとなった。そんな寂しい学校も、子どもたちが学校に戻ってくると、途端に賑やかさを取り戻し、勢いを持って進み始めた。やはり学校は子どもたちのための物であり、子どもたちの持っているエネルギーは様々な物とかわりを持ちながら学校を、そして学びを突き動かしていくものと感じた。

生活科では「出会った子どもたちと共に活動を創り出し、共に楽しみ学び合っていく生活科をめざしていこう」と委員会をスタートさせた。また、昨年度までの研究から、子どもが自己発揮していくことができる環境として、対象と夢中になって関わるができる場を繰り返しつくっていくことの重要性を確認し合い、上記のテーマを設定した。

そして、研究をすすめるにあたり、昨年度の研究から示唆された次の2視点を引き続き研究の重点に据えることとした。

研究の視点

- ①対象と繰り返し関わる中でみえてくる子どもの姿とその変容
- ②子どもと共に楽しみ、学ぶ教師の関わり

上記の2つに視点について、委員それぞれの実践から追究していくことに加え、丸子中央小学校1年生の実践からも学ばせていただきたと考えた。

三 研究の経過

＊新型コロナウイルス感染予防のため、今年度のテーマや研究内容については会合を行わず、FAXでお互いに連絡を取り合っの決定に至った。

・第1回 7月28日(火) 実践報告①

委員が実践レポートを持ち寄り発表・意見交換

・第2回 9月18日(金) 授業参観

丸子中央小学校1年生「あつまれ!たからにわ」授業参観

・第3回 10月9日(金) 実践報告②

・第4回 11月23日(木) 実践報告③

まとめ・反省

WEBページに掲載するレポート原稿について

四 研究内容

1, A 小学校の実践

『子どもの見つめる「世界」を共に味わいたいと願って』

「毎日、子どもたちと外に出て、一緒に遊ぶ!」

それが、1年生の担任をさせていただくことが決まった際に立てた目標の一つ。それは子どもたちが入学して半年余りが経った今も変わらず、晴れの日でも、雨の日でも、元気に外に飛び出していくこともたちに力をもらいながら、一緒に外遊びを楽しんでいる。

毎朝、朝の会を終え、子どもたちと外へ出る。「今日は子どもたちに、これに出合わせたいなあ」というものがある。子どもたちがそれに出合った時、一体どんなことを感じ、味わっていくのか。それを楽しみに、毎日子どもたちと外へ出かける時間を楽しみにしている。

11月18日(水)。この日、朝、中庭へ行くと、前夜の風で舞い落ちた落ち葉がたくさんあった。毎日、外遊びを続けている子どもたち。『きっと子どもたちは、この落ち葉に気付くだろうな。一体、何を始めるかな』。そう感じながら、子どもたちを見ていると、さっそく、前日とは異なる中庭の様子を察し、落ち葉を使って様々な遊びが始まりました。



「先生、見て!雨みたい!!」

その声に振り向くと、落ち葉をかき集めて上に投げ、舞い落ちる落ち葉を楽しんでいたのはM児。

この日の朝は、風がなく、落ち葉がまるで雪のようにひらひらと舞い落ちていった。私も一緒に落ち葉を投げながら、「よ〜し、空中でキャッチだ!」と伝え、子どもたちが次々と集まり、落ち葉キャッチ大会が始まった。R児は、滑り台の上に上り、より高いところから落ち葉を投げ始め、その下では子どもたちが踊るように空中で落ち葉を集めようと必死(笑)。時折、風が少し吹く度に、「うわあ〜」と言いながら、風に舞う落ち葉を子どもたちと味わった。

別の方に目をやると、Y児が落ち葉を布団にして、気持ちよさそうに寝そべっていた。「落ち葉ってあったかいんだよ〜」。そう語るY児の言葉もあたたかい。私もY児の隣に横になり、落ち葉の上に寝転んだ。足の裏で踏んでいた時には、踏みしめる度になる音を楽しんでいた落ち葉。それを背中の下にした時、何とも言えない“あたたかさ”を感じた。Y児が落ち葉に感じていた“ぬくもり”はこれなんだ。そう感じた。「ほんとだ!あったかいね!」。そう伝え、隣で寝転んでいたY児がにっこりと笑い、「でしょ!ぼく、こうやるの、大好きなんだ!」と語った。しばらく寝転び、2人で空を見上げていると、「先生、今日、雲がいつもよりゆっくり動いているね」とY児。その言葉にふと立ち止まらざるを得なかった。自然の中に体まるごと飛び込み、“その日、その時”を味わい、“移りゆく季節”を体いっぱい味わっていくY児。そんなY児の世界をどれだけ共に味わうことができていたのだろうか。Y児の見ようとしている世界をどれだけ共にすることができていたのだろうか。そして、自分が気付くことができなかった、自分一人では味わうことのできなかった世界を味わっているY児が、うらやましくも感じた。

『子どもを知りたい』。

もしかしたら、それは、おこがましいことなのかもしれない。たった一人の子どもの見ている世界すらも共にすることのできない自分があることを思い知らされる。それでも、『この子のことが知りたい』『この子の見ている世界を見たい』という思いは湧き上がってくる。その思いを止めることはできない。



「子どもを見る」のではなく、「子どもの見ている世界を共に味わう」ことを願いながら、また、体いっぱい“その日その時ならではのもの”を味わっていく子どもの“すごさ”“しなやかさ”を感じながら、今後も日々の外遊びを楽しみ、その中で子どもたちに育まれていくものを見つめ続けたいと思う。

2 , B 小学校の実践

『裏山と子ども』

B 小学校には「裏山」と呼ばれている、遊び場がある。そこには、さまざまな種類の木や植物、ほたる池、小川があり、多くの生き物が生活している。裏山には遊具などはなく自分たちで遊びを考えなくては行けないが、その分なんでも自由に遊びを作れる。休み時間になると一目散に裏山に遊びに行く2年生。そこでどんなことに夢中になり、発見し、学んでいるのか知りたくなり、「裏山」を題材に生活科を深めることにした。

【5月20日】いざ裏山へ

まだ肌寒い日だったが、子どもたちの興味はほたる池にあった。普段から裏山で遊んでいる子は、ためらうことなくはだしになり池に入っていく。「つめた〜い!」「ザリガニがいる!捕まえろ!!」と何がいるかわからない草藪に手をつっこんでいた。一方、あまり裏山で遊ばない子は「どうしよう・・・。」と、楽しそうに騒いでいる友だちを遠目で見ています。そのうちに「私も入ってみようかな。」と勇気を出してため池に入り、ザリガニを捕まえた友だちにザリガニの持ち方を教わっていた。

【6月2日】ルーペで見てみよう

前日の休み時間に裏山にルーペが落ちていたことから、「ルーペを使ってみよう。」となり、今回は全員にルーペを持たせて授業を始めた。ルーペで捕まえたカニのお腹を見て、オスかメスか判断している子や、ダンゴムシの足の数を生懸命に数える子もいた。また、蛇イチゴを見つけると「種がたくさんある!」と、石ですりつぶしながらジャムみたいと手を赤くそめながらおまごのように遊ぶ子もいた。そのまま2時間目休みに突入したが、「まだやっていたい。」と、夢中になってやり続けていた。

【6月16日】生き物いるかな?

暑くなり、裏山で見つける生き物が多くなってきた。「生き物をクラスで飼ってみたい。」と意見が出たので、水槽と虫かごを用意した。さっそく、小クワガタ、おたまじゃくし、ダンゴムシ、シラガダユウ(毛虫)を捕まえることができ、飼うことになった。生き物を飼うということは命に責任を持つことと教えると、それぞれのグループを作り、図書館で飼い方の本を読んでいた。名前も付けた。

- ・小クワガタ ……土、落ち葉、枝で環境を作ってあげていた。家からカブトムシ用のゼリーを持ってくる子も。
- ・おたまじゃくし ……池からくんできた水、水草、カエルになった時に乗れる石で環境を作り、給食で落ちてしまったパンをあげていた。水もすぐに緑になることから、休み時間に重い水槽を何度も裏山に運び、水をかえてあげていた。徐後ろ足ができる、顔がカエルになってくる(まだ黒色)、しっぽが短くなる、緑になりカエルになる、と成長の過程が分かりやすく、登校するとすぐに様子を見る子が多かった。カエルになると、餌を用意するのが大変(生きた虫)となり、ほたる池に逃がした。
- ・ダンゴムシ ……土、枯れ葉、枝、石などで隠れる場所を作った。暗いところが好きと知り、水槽を棚の中にしまうようになった。家から霧吹きを持参し、毎日水で濡らしてあげていた。
- ・シラガダユウ ……大きくてきれいな緑色をした毛虫。キヤーという子もいたが、歩きが意外に速いと驚いていた。「首を振りながら糸を出してる!」とさなぎになるところも見れた。より安全な場所でさなぎになりたいら

しく、虫かごの上の方でさなぎになる毛虫が多かった。

【7月7日】生き物と遊ぼう

「家で飼っている生き物、みんなに見せてあげたいから持ってきてもいい？」と聞かれ「いいよ。」と答えると、カブトムシのオスやメス、クワガタなど持ってくる子が多くなり、どんどんクラスの生き物が増えていった。休み時間になると、「角をやさしく持つんだよ。」「見て、服にくっつくよ。」「闘わせてみよう。」「と、遊んでいた。

授業での裏山では、「散歩させたいな。」と、クラスの生き物を持っていき、切り株の上においたり、自然の蜜を吸わせたりしていた。

【7月21日】雨の日の裏山

雨の日でも傘をさして裏山へ。少し遅れていくと、傘をさしていない子がいる。濡れてしまうと声をかけようと近くに行くと、大きな葉っぱの木の下だったので、雨が降ってこなかった。「傘をささなくてもいいね!」と、普段と違った発見をしていた。また、「小川の水が増えてるよ。」と、水の中を覗き込み、沈んでいる木を持ち上げ中からダンゴムシに似た生き物を発見していた。

【9月3日】裏山を抜け出し近所の神社へ

「夏休みに近所の神社に、カブトムシがいたよ!」との声があり、みんなで行ってみることにした。カブトムシは時期的にいなかったが、裏山にはいないありじごくやくつつき草などを見つけ、裏山とは違った発見をしていた。せみの抜け殻集めをする子もあり、山盛りに集めていた。夏の終わりを感じていた。

【9月17日】二回目の神社

自由行動にする前に今回は、神社の隅々まで探検をした。金剛力士像を見ると、「強そう。」「動いたよ!」と怖がっていたが、手をあわせたり、中を真剣にのぞいたり、興味をもっていた。飛んでいるこうもりを見つけ、みんなで追いかけて回した。

【9月24日】やっぱり裏山がいいかな

すっかり秋になってきた裏山。とちのみ、どんぐり、木の実、お花を拾って集める子、おままごとをする子、土に埋めて芽が出るか実験する子など、落ちている自然に興味をもつ子が増えた。

また、使う道具として、ペットボトル、しゃべる、ざる、水中ばけつ、どんぐり穴開け機を用意した。

【10月12日】秋の裏山

久しぶりに暑くなった日。木で橋を作っていたグループが、今日はより水の冷たさを感じたいのか、ダム作りを始めていた。大きな石を持ち上げたり、木を組み立てたりと楽しんでいた。女の子たちは花を集め、花束にして、ペットボトルに入れ、教室に飾っていた。木登りをする子が増え、器用に登ったり教え合ったりしていた。始め降りるのを怖がっていた子も、一度勇気を出して降りられると何度も挑戦していた。



【10月26日】準備をしっかりと取り組む

今回はいつもと違って、裏山で何をして遊びたいのか明確にしてから取り組んだ。そうすることで、使いたい道具を事前に考え準備することができたので、いつも以上に裏山で遊びたい気持ちが強くなっていた。

・ひみつきちグループ…2つのグループに分かれていたが、お互いの基地の範囲を仲良くお隣に決め、ロープで仕切りを作っていた。

深い穴を見付け、葉っぱをたくさん入れ、落とし穴を作っていた。

その後、木にロープをひっかけたいとなる。投げ方を変えてみたり、ロープの持つ位置を変えたり、木の棒をロープの先に付けて投げてみたりと試行錯誤をしていた。

・はっぱグループ …「きれいな葉っぱあるよ。」「どんぐり落ちているところ知っているよ!」と、声を掛け合いながら葉っぱや木の実を集めていた。それを画用紙に貼り、図鑑を作ったり、海を表現したりと楽しんでいた。



・カフェグループ …自分たちでお皿を準備し、葉っぱをちぎったり、木の実をつぶしたりして料理をしていた。しばらくすると、他のグループの友だちを呼びに行き、お客さんとして料理を提供していた。

・お花グループ …様々な種類のお花を摘み、ペットボトルに生け教室に飾ったり、花束にしお家に持ち帰ったりしていた。花束を作る時に、「長い葉っぱを入れた方が、ボリュームが出るよ。」「私は、カラフルな花束にしよう。」と声を掛け合っていた。

・宝箱グループ …当日ロープを持ってきたことからターザンをして遊びたいと急遽願いが変わった。ロープを枝にくくりつける。しっかり結べたのは良かったが、幹の真上に結んだので、ジャンプした時に幹にぶつかり、ターザンのように揺れることができなかった。大きな石も真下にあったことから危険と感じ、当初このグループが計画していた木の実を集め、宝箱を作ることにしようと声かけをした。

【11月11日】今、この瞬間何をしたいか見る

前時にターザンが危険なため、違う遊びにさせた。その後このグループは活動をしていたものの、先程までの勢いがなくなってしまっていた。そのことを踏まえ、何をして遊びたいか考え準備していても、目の前にいる子どもたちが今、何をしたいのか見ることを心掛けた。

・まとあてグループ …家から持参した割りばし鉄砲で遊んでいたが、Yの形をした枝や、鉄砲のような形の枝を見つけ、「こんなの使えそう?」と渡すとパチンコや弓矢を作り始めた。

・ブランコグループ …斜めに出ている枝の位置に紐を結ぶことができたので、揺れることができた。また、ロープの下に板をくくりつけると、座りながら揺れるようになった。新しくやりたい子が来ると、快くグループに入れ、乗り方を教えていた。

・カフェグループ …前時とほぼ同じメンバーでのスタートだったが、違うことがやりたいと、グループを抜け出しブランコグループに合流した。残った子たちは、虫のごはんを作ると、男子をお客さんとし驚かしていた。

・お風呂グループ …雨が降ったときのために事前に濁いた葉っぱを大量に用意しておいた。お風呂の場所を決めると、掛け合ったり、もぐったりと楽しんでいた。男子たちが激しく遊んでいたため、女子たちがもっと静かにやりたいと分かれ、自分たちで温泉を作っていた。



3 , C 小学校の実践

『ぼくたち わたしたち 一年探偵団』

4・5月の休校を経て、6月子どもたちが学校にそろった。4月の数日の間、十分に学校をめぐることもできず、学校には何があるのか、どんなところなのかもわからないまま6月を迎えてしまった。子どもたちは6月になって、学校のこともよくわからないまま、ゆっくりと慣れていく時間もないまま学習も進めなくてはならないのか。こんなことはいまだかつてなく、私も不安でいっぱいだった。

1年生の子ども達は、エネルギーの塊のような子が多く、学校での生活に、期待で胸をいっぱいにし、張り切って学校に来てくれている。しかし、そのエネルギーは時として自己中心的なものであり、自分の思いだけを強く主張しあい、トラブルも絶えない姿も同時に見られていた。また、一方では新しいことに不安を持ち、自分に自信が持てずに、学校生活を送っている子も少なからずいた。子どもたちのエネルギーを、クラスの和をつなぐものにできないか、また、自信の持てない子たちに「できた」という思いをもってもらう手立てはないか、そういう思いで学級をスタートさせた。

初めての学校探検を経て

6月はじめに学校にはどんな教室があるのか見て回った。子どもたちは一つ一つの教室に目を輝かせていた。職員室では、何人かの先生がお仕事をしている姿を見て、食堂や保健室では、先生方がどういった部屋なのかを説明してくれた。

教室に帰ってきてから、子ども達とどんなものを見つけたか、どんなことを思ったかなど話を聞く中で、もっと知りたいと思ったことを聞いてみた。「小学校はいつから始まったのか。」「何人の人が過ごしているのか。」「学校には、大切な場所とか秘密の場所があるのか。」など、子どもらしい素直な反応がたくさん返ってきた。その中で一番多かったが、先生に関するものであった。「校長先生の名前は何だろう。」「教頭先生の名前は何だろう。」「2年生の先生は知っているよ。」「お兄ちゃんの先生は〇〇先生だよ。」「誰それ、知らない。」「ぼくは〇〇先生を知っている。」など、はじめの質問から話は太いにそれ、『知っている先生大会』になっていった。それならと、「学校の先生たちのことが気になる人が多いんだね。それならみんなで探偵さんになって、学校の先生、全部調べちゃうか。」と投げかけたところ「知りたい!」という反応が返ってきた。こうして、活動が決まった。

子ども達をその気にさせる活動の名前

一年生の子ども達は「ごっこ遊び」が好きで、役の名前がつくとその通りになりきってしまう素直さがある。また、子どもたち自身もなりきることに楽しさを感じてくれる。学校探検では今回「探偵さん」になった。また、あさがおさんとの関わりでは「お父さん・お母さん」になっている。朝顔さんの変化や困ったことをみんなに相談して、みんなでいい方法を考える活動は「あさがおさん会議」という名前を付けている。「会議」とつくだけで、子ども達はそれらしく振舞うことができる。なりきっている子は「こうしてみてもうどうでしょうか。」など改まったような言い方で発言をしてくれる。



今回、学校探検の活動名は「1年探偵団～学校の先生たちのなぞを追え～」というものになった。子ども達は「おしりたんてい」で探偵にはなじみがあり、探偵団のマークを作りたいという子も出てきた。みんながマークに入りたいモチーフを考えた結果、「宝箱」「かっこいい!」「きらきらした星(学級目標の『ひとりひとりがきら☆ぼし』からきている)」がモチーフとなってマークが完成した。子どもたちの気持ちは、すっかり「1年探偵団」である。「探偵団、諸君。」という担任の呼びかけとともに、子ども達に渡された謎を解くカギは、学校の先生たちの顔写真と学校の大きな地図だけである。すでに知っている先生がいる一方で、誰も知らない先生も何人もいる。子どもたちは学校の先生たちの顔写真を前に「きゃ～～～!こんなにいるの!？」と歓声を上げた。

生活科が他の教科と横断的に学習する良さ

調べ活動はもちろん初めてなので、手順はこちらで示した。子どもたちも名前以外にも聞いてみたいことがあったので、名前以外に質問をすることになった。

- ① 学校の大きな地図と先生方の顔写真から自分の調べる先生を決める。
- ② どんな先生なのか質問したいことを決める。
- ③ 丁寧な聞き方、自己紹介の仕方をみんなで考え、練習する。名刺を書く。
- ④ 二時間目の休み時間を使って、実際に聞きに行く。どこにいる先生か分からないときは先生や上級生に聞く。
- ⑤ 聞いてきたことを、クラスの人々に教えてあげる。地図にまとめる。

この中で、名刺を書いたり、丁寧な聞き方の練習、発表するところは国語の「どうぞよろしく」「なんていおうかな」「こんなものみつけたよ」と通じるところがある。「探偵さんが渡す名刺だから字は丁寧じゃないといけない」、「自分たちだけで聞きに行くのだからなんていうか考えないといけない」と子ども達も必要感をもって学習ができた。

探偵団の活動を通して「先生と仲良くなれた」という思いを持てた A さん

A さんは、保育園からも「初めてのことに對する不安が強い」という申し送りを受けていた子である。申し送り通り、算数の初めての単元など、ひとつひとつの「初めて」に出会う度に不安で涙を流して、学校生活を送っている。今回の活動も不安が多いだろうなという思いでいたが、ごっこ遊びが好きなこともあって、探偵さんになるんだという気持ちで③の活動までは、泣かずに聞きたいことを決めだすことができていた。この子に限らず、一人で聞きに行くことが不安という子もいたので、みんなで話し合った結果、二人組で聞きに行くことが決まっていた。一緒に聞きに行く B くと共に言い方の練習も何度も繰り返し、お家でも聞き方の練習をしてきた。ただ、やはり実際に聞きに行く段階になって不安が出てきた。

自信を持ってほしいと思って作った、練習をたくさん繰り返して、立派な探偵さんになれた印である「探偵団バッジ」を胸に、多くの子がインタビューに「行ってきます!!」と出かけていくのを見ながらも、どうしても一歩が出なかった。B くんが懸命に励ましてくれたが、この日はインタビューには出られなかった。

次の日は、みんなで決めた「なんてきいてくるか」を書いた紙を手を持ち、練習する A さんの姿があった。「不安だったら先生も一緒に行くよ。」と伝えると、うなずいて「行ってみる。」と立ち上がった。B くんや周りにいた子たちも「がんばれ!」と声をかけてくれた。しかし、自分の担当の先生を前にすると声が出ない。この日も質問はできずに帰ってきた。私は A さんにとっては、負担の大きすぎる活動だったかなと思い始めて「一緒に行ってくれている B くんに聞いてもらってもいいんだよ。一緒に行くだけでもいいんだよ。」と声をかけていたが、A さん自身は「探偵さんになって、自分で聞きたい。」という思いがあった。三日目の朝になって「先生、行けるかもしれない。」と言ってきてくれた。多くの子の励ましを受け、B くと共にインタビューに向かった。なんてきくか、ひとつひとつ担任に確認しながら A さんは自分でインタビューを終えることができた。担当の先生からは「すごいね!よくがんばれたね!」とたくさんほめてもらい、教室に帰るとクラスの子たちからも「やったね!がんばったね!」とほめてもらえた。A さんは大きく息を吸い、大きく息を吐いた。A さんにとって大きなチャレンジが一つ実を結んだ瞬間であった。

学級だよりで、A さんのインタビューの写真を載せると「あ、私が載ってる。」と A さんはうれしそうに話し、お家でも嬉しそうにその写真をお母さんに見せたい。活動の振り返りでは、「担当の先生と仲良くなれてよかった。名前をしっかりと憶えられた。」とふりかえっていた。担当してくださった先生によると、A さんは廊下でその先生に会うと「あ、〇〇先生だ!」と声をかけているらしい。初めてのことが苦手な A さんにとって、探偵さんと

して大きな課題にチャレンジできたこと、周りに大いに認められたことは「できた」という思いにつながってくれたのではないと思う。

1年探偵団のその後

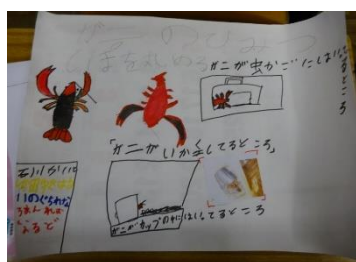
全員のインタビューが終わり、「探偵団調査報告会」が開かれた。自分の担当した先生以外の先生のことを聞くことを楽しみにしていた子どもたちは、一人一人の報告を興味深げに聞いていた。また、発表する人も「自分しか知らない学校の先生の秘密」を堂々と発表できた。先生方からはひとりずつ「1年生へのメッセージ」を用意してもらい、探偵団に渡してもらっていたので、先生たちからのメッセージも嬉しそうに聞いていた。活動後のふりかえりでは、「ドキドキしたけど、先生にちゃんと話をできたのが楽しかった。」「話を聞けて、先生が大好きになった。」「知らない先生だったけど、話したらやさしくて、仲良くなれた。」「学校中の先生を知ることができた」「先生たちの秘密を知れた」「いろいろな先生の名前をおぼえた」「いろいろな先生から1年生へのメッセージをもらえてうれしかった」「新しいことを知れたから楽しかった」などの思いが出された。なかには、「クラス全員が調べることができたのが良かった」と書いてくれた人もいた。クラスみんなのことを見ている言葉がやさしいなあと思った。

みんなが調査してきてくれた先生の顔写真と、1年生へのメッセージを、学校のでっかい地図に貼ると、学校には様々な先生が、それぞれの立場ではたらいていることが分かった。子どもたちも地図を見ながら「先生の名前を忘れてしまってもこれを見れば思い出せるね。」とロクに話していた。

その後、この探偵団は、七夕やお正月の行事調べにも度々登場することとなった。みんなでつくった探偵団のマークは、何かを調べるときの合図になった。これからも子どもたちが楽しく、自分でやってみたいと思える活動を共につくっていきたいと感じている。

4 , D 小学校の実践

『教師の仕組みと子どもの願い』



D 小学校には以前ウサギが2羽おり、2年生がお世話をすることが伝統となっていた。1年生の頃からウサギにふれ合ってきており、授業でもウサギのことについて調べることを通して、2年生になったら「自分たちがお世話をするものだ」と気持ちも向かっていた。その矢先、昨年度の冬に死んでしまい、生き物と触れ合う機会がなくなってしまった。

8月にザリガニを譲ってもらう機会があり、子どもたちが生き物と触れ合う機会を作ってあげたいという教師の願いから、班で一匹ザリガニを飼うことになった。

子どもたちはザリガニの姿をみて歓声をあげ、喜んでいる姿があった。「先生あれ飼うの?」「ザリガニかわいいね」「でもさわれないなあ」と反応は様々だったが、すぐに受け入れて飼うことには意欲的だった。

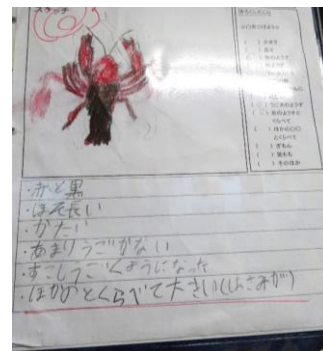
まず名前をつけることにした。名前はザリガニの「がに」体勢がごろんとしてしていたから「ごろん」など、子どもたちが思い思いの名前をつけていた。名前がつくと愛着がわき、水替えも班の中で順番を考え、毎朝欠かさず掃除をしていた。

虫も含めて生き物自体に苦手意識を持っているA男。以前より、外に遊びに行っても虫を見ると距離をとり、遠くからおっかなびっくり様子を見ている姿があった児童である。ザリガニを飼うことになっても手で直接触れず、割り箸を使ってザリガニを移動している様子があった。触るのは苦手だったが、ザリガニの観察については興味深く行っていた。

A男の班ではザリガニが脱皮をしたり、はさみの自切をしたりと、珍しい姿を見せてくれた。そのような姿を生で

見ることによってA男はザリガニにさらに興味がわき、持つことはできないが、触ることができるようになった。ザリガニにはじめ恐怖心を持った子でもザリガニが見せる様々な変化を体験する事により、ザリガニに対する愛着が大きくなり、行動が変わるということが分かった。

今まで生活科の授業を行うときには、子どもたちの願いや想いを大切にしようと考えていた。外で思いっきり遊ぶことで、子どもたちが自然と遊びたいことや遊びたいものを見つけ、楽しむ姿に良さを感じていたからだ。しかし、ザリガニとのふれあいから「仕組む」大切さを学ぶことができた。きっかけは教師が作っているが、子どもたちにとってみればそんなことはどうでも良くて、ふれあう対象に魅力があれば、いきいきと活動を始めることがA男を含めた子どもたちの姿から分かった。生活科の授業ではいつも子どもたちの姿から学ばされることが多い。これからも生活科の授業を通して自分の凝り固まった視点を改善していきたいと思う。



5, E 小学校の実践

『学校の周りを探検しよう』

4月から E 小学校の2年4組の子どもたちとの生活が始まった。クラスの子どもたちは、登校するとすぐに荷物の準備を終え、校庭に遊びに行く子が多い。休み時間には、多くの子たちが外で鬼ごっこをするなど、とても活発な子どもたちである。その反面、学校やクラスのルールの厳守や、人の話を聞くことが難しいという課題もある。そういった子どもたちと私は一緒に校外へ出て子どもたちが行った先でどんなことをするのか、何を感じるのかを知りたいと思い、学校の周辺に行く活動を行った。

学校近くの公園へ

5月、子どもたちに学校の周りに何か楽しい場所はあるか聞くと、「すぐ近くに公園があるよ。」「みんなで試みよう。」という子どもたちの声から近くの公園に出かけることにした。公園には大きな遊具、多目的広場、草むらがある比較的大きな公園だった。遊び方は子どもたちによって異なっていた。鬼ごっこをする、遊具で遊ぶ、虫を見つけるなど子どもたちがそれぞれに自分の遊びたいこと、したいことを行っていた。何回か同じ公園に行くと、数人の子どもたちから「違う場所へも探検に行きたい。」という声が上がった。今回は私から「〇〇神社っていうところに行ってみよう。」と伝え、子どもたちもその場所へ行ってみようということになり、神社へ出かけることになった。

神社に行く途中、用水路や田んぼをのぞき込んで、様々な生き物(おたまじゃくし、ドジョウ、ザリガニの赤ちゃん)を見つけて喜ぶ姿があった。神社に着くとすぐに、子どもたちはカブトムシやクワガタの死体を見つけていた。そして「先生、見て見て。」と嬉しそうに担任に見せる姿があった。「体がないから何かに食べられたのかも。」「きっとカラスだね。だってカラスの声聞こえるじゃん。」と言って周囲の様子から想像している姿があった。虫の苦手な子は蚊に刺されるのが嫌で担任のそばから離れない子もいた。すぐに神社の周りを使って鬼ごっこを始めていた。大きな木に隠れるなどいつもとは違う場所でどうしたら楽しくなるかを考えて鬼ごっこを楽しんでいるようだった。



再び公園へ

しばらく探検に行けない日が続き、久しぶりに探検に行くことができるようになった。子どもたちにどこに行きたいか聞くと「最初にみんなで試みた公園に行きたい。」という意見が多く出たので、みんなで学校の近くの公園

へ行くことに決めた。翌日、公園に到着するとすぐに子どもたちの多くが「草がすごい大きくなっている。」と言っていた。季節が梅雨から夏に変わったことを実感しているようであった。「草を踏んづければ道ができるよ。」と言って、子どもたち数名で草を踏みつけながら道を作り、遊びたい所まで遊びに行く姿が見られた。帽子を網代わりにして、モンシロチョウを捕まえる子どもたちや、細長いアスパラガス見つけた子どもたちは、アスパラガスを根元から取って振り回して遊んでいた。私も実際に子どもたちがやっていたのと同じようにやってみるとアスパラガスがビュービューとなり風を切る感触を感じることができた。



古戦場公園へ

9月下旬、「古戦場公園」という公園に行くことにした。木々が生い茂り秘密基地のようにしている場所を見つけると、普段はトラブルの多いA児とB児の二人が協力して道を開こうとする姿が見られた。また先に遊んでいた男子からは「ここは女子だけじゃ危ないから男子と女子がペアで入ろう。」と言って、その場にきた女子とペアになり秘密基地探検を楽しんでいる姿があった。



2回目の古戦場公園への探検では、昆虫採集が好きなA児は今まで見たことない蛾がいたことを嬉しそうに話し、蛾の様子をしばらく見ていた。さらにA児は2～3種類のバッタを見つけたり、かまきりを見つけたりして喜んでいる姿があった。捕まえたり見つけたりする虫の種類の変化から季節が変わったことを感じているようであった。普段、休み時間は教室の中で一人読書を楽しむことが多いB児が滑り台のところで「〇〇ちゃん一緒に滑ろう。」と言って誘う姿があった。またB児はシーソーへ遊び場を変え、自分から滑り台で遊んでいた友達に遊び方を伝える姿も見られた。彼岸花を見つけてきたC児が「花の名前が分からない。」と言うと、D児が「Bちゃんなら知ってるよ。」と言い、C児はB児に花の名前を聞きに行った。B児は嬉しそうに「彼岸花だよ。」と伝えていた。普段なかなか見ることのできないB児の活発な姿を多く見る事ができた。

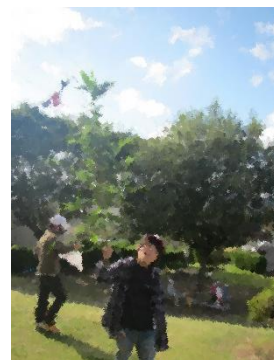
竹を見つけてきたE児は竹を振って遊んでいたが、しばらくすると見つけてきた彼岸花を、近くに落ちていたペットボトルのラベルを紐がわりにして、竹に結び付けて喜んでいた。その場にあるもので遊び方を工夫し楽しくしようとする子どもの探求心の大きさに驚かされた。学校への帰り道、道に落ちていた大きなペットボトルを見つけた子どもは「これ何リットルくらい入ると思う。」と聞いてきたので、調べ方を聞いたら「マスだよ。マス!」と言って休み時間に1リットルマスで量る姿があった。



探検を通して

探検中や目的地では子どもたちは友だちの様子を見て真似をしたり一緒に遊んだりすることを繰り返しているようだった。そういった子どもたちの言動が新しい遊びに発展したり新たな発見につながったり子どもたち同士が楽しさを共有していたように感じた。楽しさを共有した経験は、子どもたち一人ひとりの遊びたいこと、やってみたいことの達成感や満足感につながっていたのではないかと。そして子どもたちが感じた達成感や満足感が国語や算数といった学習やその他の活動への意欲につながっているように日々の子どもの様子を見て感じる。

子どもたちはどんな場所へ行っても子どもたちが「楽しい。」「こんなことしたらおもしろそうだな。」ということをも自分たちで考え、実際に体を使って表現していることが多かったように感じる。どんなことでもすぐに遊びや楽しみに変えることができる子どもたちの発想力の豊かさや考え方の柔軟さに驚かされることが多かった。そして、私自身子どもたちが楽しいと感じる世界をほんの少しだけでも子どもたちと共有



できる探検の時間はとても貴重な時間であった。

「先生、今度探検いつ行くの。」「今度の探検は〇〇に行こうよ。」と目を輝かせながら伝えてくる子どもたちとこれからも一緒に探検を楽しんでいきたいと考えている。

6, F 小学校の実践

『1学年生活科「あつまれ!たからにわ」の実践から学んだこと』

(1) 部会内研究テーマと願う姿

学ぶ力の育成～自ら課題を見つけ、わくわくしながら追究していく子どもの姿をめざして～

子ども達が対象と関わっていく中で願いを持ち、自己の願いを実現するための方法を探りながら、繰り返し試していくことを通して、より対象と深く関わることができる子どもの姿を目指したい。

(2) 部会内テーマ具現のための手立て

子ども達は、学校の中での遊びを通し、じっくりと対象と関わろうとしている。時間をかけて繰り返し対象と関わる場を保証することで、「不思議だな」「もっとこうしたい」等と新たな発見や自分が試してみたい事を見いだそうとする子どもの姿が見られた。また、個々に活動をしている中で自分の感じた事を他の人に伝えることで、相手の子どもにとっても新たな発見につながり、より活動が活発になっていくことが分かってきた。そのために教師が子どものつぶやきや取り組みの姿を全体に広げたり、同じ願いを持っているであろう子ども同士に声がけをする支援をしたりすることで、個の学びから少人数、さらには全体の学び合いにつながるであろうと考えられる。

以上の事から①対象とじっくり関わる時間の確保

②子どもの願いをつなげ、広げる支援 が大切だと見えてきた。

そこで、これら二つのことについて、より具体的な支援のありかたを考えていきたい。

(3) 授業の概要

1年生だけが遊べる中庭で、春からたくさん遊びこんできた子ども達。夏から秋に季節が変わる中、中庭を「たからにわ」として遊びを繰り返してきた。授業公開時では「かぜやさん」「アスレ チック」「むしさがし」「どろだんご」「やますべり」「くさ・はな・み・は」の遊びを通して自然とふれあうことの楽しさを感じることができた。

生活科学習指導案

令和2年9月18日(金)3校時

1年3組 男子17名 女子11名 計28名

1 単元名 あつまれ! たからにわ!! ～あき～

2 単元設定の理由

1年3組の子ども達は、休み時間になると学校の様々な所へ出かけて行き、色々な発見をして楽しむことができる。特に中庭は、他学年は使用しない“1年生の庭”なので、1年生が思う存分自由に遊ぶことができ、その中庭で、子ども達は虫を取ったり花を集めたりして自然と触れ合いながら、砂場で遊んだり追いかけて遊ぶ様々な遊びを中庭で楽しんできた。雨が上がったあとの遊びでは、一人の子が、“雨上がりに散歩をすると、雨は上がっているのに、中庭の木の下は、木から滴る滴が雨のように降っている”ことに気がつき、周りの子ども静かに木から落ちる滴の音を楽しむ姿が見られ、子どもたちが自然からいろいろなことを感じていることが伝わってきた。そのような子どもたちに、季節が秋に変わりつつある中庭で更に遊びを深めていくことで、夏から秋への変化を感じ、より一層自然とふれあう楽しさを感じてほしいと願い、本単元を設定した。

3 単元目標

中庭で見つけたものを「たからもの」として発見する楽しさや、中庭での遊びに楽しさを感じている子ども達が、秋の中庭で見つけたり、遊んだりしたものやことを「たからもの」として発見する活動を通して、夏から秋への変化、それを利用した遊びの面白さに気づくとともに、季節の変化を取り入れ、自分の生活を楽しくしたり、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとしたりすることができる。

<評価規準>

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・身近な自然や物を利用して遊べることに気がついている。 ・遊びの楽しさや、遊びを工夫したり遊びを創り出したりする面白さに気づいている。 ・自然の中のきまり、自然の事物や現象の不思議さに気づいている。 ・約束やルールが大切なことや、それを守って遊ぶと楽しい事に気づいている。 ・友だちと関わって遊ぶ楽しさ、友だちのよさや自分との違いに気づいている。	・身近な自然や物の中から、遊びを考えている。 ・比べたり、試したり、見立てたりして、遊びを工夫している。 ・遊びの約束やルールなどを考え、遊びを創りだしている。 ・必要な道具や、道具の安全な使い方を考えている。 ・遊びを工夫したり、友だちと関わって遊んだりしたことを振り返り、自分なりの方法で表している。	・身近な自然や物を利用した遊びに関心をもって遊ぼうとしている。 ・思いや願いをもって、遊びや遊びに使う物をつくろうとしている。 ・みんなで楽しく遊ぶために、道具や用具の準備、片付け、整理整頓をしようとしている。 ・友だちと関わりながら、みんなで楽しく遊ぼうとしている。

4 本時案

【主眼】

自分の好きな“たからにわ”遊びを紹介しあい、遊びの視野を広げている子ども達が、秋の中庭の「たからもの」を見つかけたり、友だちと関わって遊んだりすることを通して、自然との関わりをさらに深め、遊びをより楽しくすることができる。

【本時の位置】 （全7時間中第3時）

前時 自分がおすすめの“たからにわ”遊びを友だちに紹介し、次に遊びたいことを考えた。

次時 さらに“たからにわ”で遊ぶ。

【指導上の留意点】

- ・スコップや、棒・枝は、危なくないように、持ち運び方や扱いについて掲示する。

【展開】

段階	学習活動	予想される児童の反応	指導・支援・評価	時間
課題把握	1 何をして遊ぶか確認する。	・色水づくりの続きをしたいな。 ・川をどんどん掘りたいな。 ・山をたくさんすべりたいな。 ・砂場で遊びたいな。 ・虫を見つけないな。	・本時の願いや、やることを確認できるように、前時挙がった”遊びたいこと”をいくつか“あきのたからちず”に貼り掲示しておく。 ・遊びが決まっていな子が、本時にやりたいことを見つけられるように、いくつかの遊びや、今日やりたいことを発表する場を設ける。	3
	ぼくたち・わたしたちの“たからにわ”で いっぱいあそぼう！			
追究	2 自分が遊びたいもので遊んだり、作ったりする。	・アスレチック・風やさん ・山すべり ・どろだんご ・虫探し ・草、花、実		30
まとめ	3 「はっけんニュース！」で今日の気づきを発表する。 4 次の時間やりたいことを発表する。 5 かたづけ	・こすったり、つぶしたりしても色水が作れることがわかりました。 ・スコップはこうやって使うと沢山掘れて面白かったです。 ・草のあるところは滑りやすくて楽しかったです。 ・砂場の中にこの木の実が落ちていたことがわかりました。 ・ここに、〇〇の巣があって嬉しかったです。 ・この草が一番強いことがわかりました。 ・水が流れるくらい、川を大きくしたいです。 ・もっと実を見つけないです。 ・もっと強い草がないか探したいです。	・発見したことを実際に見て共有できるように、レポーターのように、現場（遊んだ場所）に行つて発表するようにする。 ・自然に対する気づきをより明確にできるように、子どもの言葉を使いながら、子どもが気づいた良さを認め、全体に伝える。 ・みんなに相談したい子がいたら、全体で共有しアイデアを出し合うようにする。 自然との関わりを深め、遊びをより楽しくすることができたか。	12

(4) 授業研究会より(指導主事 田中 誠 先生)

教材研究の大切さ～子どもの願いの教材化を～

生活科において、子どもの願いを教材化し、実践につなげていくプロセスとして次の段階が考えられる。

- 1 教師の願いをもつ
- 2 教師による構想
- 3 子どもの意識をとらえる
- 4 教師による素材研究
- 5 素材の教材化… 次の5つの視点で教材を吟味したい
 - 熱中性:子どもが夢中になれるか
 - 活動性:十分に力を使う場面の保証
 - 協同性:自然と力を合わせる場ができるか
 - 適時性:簡単すぎず、難しすぎない素材か
 - 発展性:教科の学習になる可能性を秘めているか
- 6 種をまく
- 7 子どもが材と出会う
- 8 課題が据わる
- 9 追究



ここまでの教材研究を授業前に終わらせることも大切だが、『授業中における教材研究』(その場でひらめき)も今後は大切にしていきたい。素材をとらえて、教師の意図を込めていくこと。瞬間瞬間の教材研究を授業内で繰り返したり、問題解決を生み出すためのさりげない準備ができる 教師を目指したい。

「子どもの思いをくみとるまなざし」とは…

①専門的な知識・技能・見識・経験

指導案が書けること=単元の構想と授業の見通しができている証拠

(単元設定の理由 評価規準 指導・評価の計画 授業

案)

まずは指導案を書いてほしい。

②「私」の人間性(性分)をも含んだ教師としての構え

子どもの内面で何が起きていたか想いを巡らすこと

(見えない部分にこそ意識を持ちたい)

【例:アスレチックに取り組んでいた E 児の様子から】

周りをきょろきょろしながら木の板を取りに行く→板を更に延長させる→石柱の置き方で改良を

→ちょっと試してみる

ここで E 児にとっての対象が何か考えてみると



E 児

アスレチックを試す

働きかけ→

働き返し←

E 児にとっての「対象」

見つめていたの

自分の体

「どうすればうまくいくのかな?」=自分の体の使い方が分かる

深い学びにつながっていたのでは?

- ・子どもが何をしたいのか、どんな気持ちなのかを子どもに寄り添ってみてあげたり、子どもの言葉に耳を傾けたりする
- ・子どもと一緒にやってみる
- ・友だちの姿をつないでみる
- ・環境を整える

ことを教師は大切にしていきたい。

(5) 実践後の子ども達 ～2年生と遊ぼう～

公開授業後も、1年生の子ども達は毎日のように「たからにわ」へ遊びに出かけ、落葉が盛んな時期も中庭で遊び込んでいる。6月から継続的に活動を繰り返していることで、彼らの中で中庭が生活の一部になってきたことがうかがえる。また、自分たちで遊ぶだけでなく、2年生を「たからにわ」へ招待して、一緒に遊びたいと子ども達の新たな願いが生まれてきた。それならばと、日程を調整して、10月28日に2年生が「たからにわ」へ招待されることになった。2年生にとっても久しぶりの中庭で遊べることに「いいの?」「やったー!」とどの子も嬉しそうな様子が見られた。

さていよいよ「たからにわ」ご招待の日。2年生もうれしき半分、ドキドキ半分で中庭へ。1年生は落ち葉に目・鼻・口の穴を空けた『お面屋さん』、山の頂上から駆け下りる『かぜやさん』、虫の観察をする『むしやさん』、『アスレチックやさん』など、それぞれお店屋さんになりきって2年生を待っていてくれた。「いらっしやい」の1年生に呼びかけに次々と2年生がお客になってお店を回っていた。2年生はどのお店に興味を示すのか様子を見ていたら、9月の公開授業時では1, 2人で楽しみ、なかなか大勢で遊ぶことが難しかった『かぜやさん』が大繁盛。「もう1回、もう1回!」と何度も築山から駆け下りて「楽しい〜!」と多くの2年生が喜んでた。また、1年生の『かぜやさん』も「きょうはお客さんがいっぱい来てる!」と、とても嬉しそうに話していた。2年生も楽しかったことを一人ひとり手紙に書き、1年生にお礼として渡すことができた。

自分たちで繰り返し遊び込んだ場で異学年との交流を仕組むことで相手意識が生まれ、子ども達の中に「一緒に楽しみたい」という思いが芽生えた事は、今後周りの人との関わり方に大きくつながっていく事が期待でき、学びの多い時間となった。

これからも子どもの思いに耳を傾け、そのときその場で子どもがどんな願いを持つのか、常に子どもの思いに立ち返って生活科の学びを深めていきたいと感じている。



五 研究のまとめと課題

Ⅰ 視点①:対象と繰り返し関わる中でみえてくる子どもの姿とその変容に関わって

(1) 同じ対象と何度もかかわりを持つことで、自分一人の活動にも夢中になり、没頭できる子が増えていく。

また、小さな変化にも気づきやすくなり、自分の発見や活動を知ってほしくなり、言葉や絵などで表現するようになる。

(2) 子どものやりたいという思いを大切に、活動を保障していくことで、子どもたちは、自分のやりたいことを満足いくまで楽しみ、さらに友だちの姿から、自分の活動の幅を広げていくことができる。

(3) 本物に触れ、感じることは子どもたちに様々なことを教え、育んでくれる。

- (4) 小さな課題解決を重ねていくことで、子どもたちは無理なく課題と向き合い、前向きに取り組むことができ、更なる活動の意欲へとつながっていく。
- (5) 動物飼育は学級で行うことが多い。しかしその方法や教師同士、子ども同士のつながりを大事に紡ぐことで、学年での動物飼育活動が実現していくことが見えてきた。

2 視点②：子どもと共に楽しみ、学ぶ教師の関わりについて

- (1) 子どもと共に歩き、共に初めての体験をし、共に驚き喜ぶ。というように、子どもと共に夢中になって活動する中で、私たちは子どもの楽しみや学びが、理屈でなく心にしみて感じるようになっていく。
- (2) 子どもが今どんな思いで活動しているか、どういった学びをしているのかということを、教師一人の目ですべてを追うことは困難なことである。子どもが今何を見つめ感じているのか、私たち自身が、不安・感心・恥ずかしさ・驚嘆・喜びなどの感情を、子どもの行動記録と共にありのままに記録し、蓄積していく。そうすることで、少しでも子どもの感じていることに寄り添えるようにしていきたいものである。教師側の場の準備、素材の研究など、丁寧に行っていく心構えと姿が必要となってくる。

六 委員名簿

塩崎 陽子(推進係・青木小学校長)

大藏 英治(川辺小) 櫻井 優(東塩田小) 山極 美帆(武石小)

服部 伸也(神川小) 寺澤 澄人(南小) 池田 愛(丸子中央小学校)